

## 【短 報】 野生動物

## 定型的な斜頸を呈した若齢スズメの3症例

黒澤 信道<sup>1)</sup> 金井健太郎<sup>2)</sup> 竹内 未来<sup>3)</sup>

- 1) NOSAI道東本所 (〒088-2311 川上郡標茶町開運10丁目25)  
 2) NOSAI道東釧路中部事業センター標茶家畜診療所 (〒088-2311 川上郡標茶町開運10丁目25)  
 3) NOSAI道東釧路西部事業センター鶴居家畜診療所 (〒085-1204 阿寒郡鶴居村鶴居南3丁目9)

## 要 約

釧路管内で収容されたスズメ *Passer montanus* の雛3例 (2例は巢内雛、1例は巢立ち後の幼鳥) において、斜頸を認めた。これらはいずれも斜頸に限定した病態で全身症状を伴わないこと、発症後は症状の進行も回復も見られないこと、概ね同日齢での発症であると推定されることから、雛に特有の定型的な病態であると考えられた。またいずれの症例も治療には反応せず、1例では頭部の病理組織学的検索を行ったが特筆すべき異常は認められなかった。原因の解明には至らなかったものの、内耳等の平衡感覚器官に限定された異常の可能性があると考えられた。

キーワード：スズメ、雛、斜頸

-----北獣会誌 61, 77~80 (2017)

小鳥の雛における斜頸 (torticollis) の症例は、傷病野鳥救護の現場では少なくないものと思われるが、獣医学的な検索・検討がなされた例はごく少ない。2012年~2015年にかけて、釧路管内において収容されたスズメ *Passer montanus* の巢内雛および巢立ち後の幼鳥で、斜頸を呈する症例3例に遭遇した。発症日齢や臨床経過などから、これら3例が定型的な病態であると考えられたので、今後症例の情報を集積して疾病の解明に資するため報告する。

## 症 例

今回遭遇したスズメ3羽の症例について、表1に概要を示した。

**症例1**：釧路管内標茶町にて、何らかの原因で巢から落下したところを収容されたスズメの巢内雛。収容日は2012年7月5日、収容時の推定日齢は孵化後10日齢。収容時にはまだ地肌が見える状態で、姿勢に異常は認めなかった。しかし収容2日目より頭部の傾きが認められるようになり、3日目には右斜頸の症状が明らかとなり、介助しないとうまく餌が食べられない状態となった (写真1、収容6日目)。

さらに給餌により順調に成長して動きが活発になると、体動に伴い転倒するようになったが、体調に問題はなかった。処置としては餌へのビタミン剤添加をおこなったが斜頸の改善は見られず、起立姿勢を維持するのが精いっぱい状態であった。結局自力採餌するには至らず、21日目に自力で飲水した後、急死した。死亡原因は誤嚥

表1. 3症例の概要

|     | 収容状況     | 収容日         | 推定日齢 | 収容場所 | 転帰      |
|-----|----------|-------------|------|------|---------|
| 症例1 | 巢内雛 (落下) | 2012. 7. 5  | 10日  | 標茶町  | 21日目に死亡 |
| 症例2 | 巢立ち後の幼鳥  | 2013. 6. 27 | 25日  | 鶴居村  | 収容場所で放鳥 |
| 症例3 | 巢内雛 (落下) | 2015. 7. 11 | 8日   | 鶴居村  | 54日目に死亡 |

連絡担当者：黒澤 信道 NOSAI道東本所  
 〒088-2311 川上郡標茶町開運10丁目25)  
 TEL 015-485-3560 FAX 015-485-3276 E-mail: n.kurosawa@nosai.doto.or.jp



写真1：症例1の收容6日目（推定15日齢）典型的な右側への斜頸



写真3：症例3の收容当日（推定8日齢）斜頸は見られない



写真2：症例2の捕獲時（推定25日齢）左側への斜頸と旋回運動



写真4：症例3の收容12日目（推定19日齢）軽度の斜頸はあるが自力採餌が可能

による呼吸不全であった。

**症例2**：釧路管内鶴居村で捕獲された、既に巣立っていたスズメの幼鳥で、推定25日齢。家族群で行動していたが、1羽だけ動きが悪く容易に捕獲された（写真2、捕獲時）。捕獲した時点で巣立ち後10日以上は経っていると思われ、短い距離を飛ぶことはできるものの、飛ぶと左方向に旋回した。ケージに收容すると旋回運動がみられ、刺激を受けると発作的に斜頸が重度となった。この個体は左側への斜頸を呈した。

一時收容したものの、治療の効果がないと思われたので、状態を確認後、收容現場の近くにて放鳥するに至った。しかし自然界において長期の生存は難しかったと思われる。

**症例3**：釧路管内鶴居村で收容されたスズメの巣内雛。何らかの原因で巣から落下したと考えられ、收容時は推定8日齢（写真3、收容当日）。右の腰部に、落下時の

打撲によるとみられる内出血が認められた。收容後半日ほど経過していたため衰弱しており、保温、強制給水・給餌をおこない救命した。その後、打撲傷は改善してきたが、3日目より頭部の傾きが認められ、右側への斜頸が明らかとなった。

收容12日目には、斜頸はあるものの餌を差し出すと自力で採餌するようになった（写真4、收容12日目）。自分から動こうとして転倒してしまうと、斜頸の症状が重度となり、起き上がれないこともあった。しかし通常の姿勢に戻してやると、また起立姿勢を維持していた。約1カ月経過した時点では、斜頸は明瞭であるもののなんとか自力で採餌もできた（写真5）。餌の変更やビタミン剤投与等の処置にもかかわらず、これも症例1と同じく病状は変化せず、收容54日目の9月2日に水鉢に落ちて溺死した。

この症例については、東京大学の獣医病理学研究室に頭部の病理学的検索を依頼した。その結果、脳において一部血管のうっ血、脳室周囲の水腫が認められたが、



写真5：症例3（8月6日、推定34日齢）斜頸を呈したまま成長した

小脳には著変がなく、病理組織学的には特筆すべき所見はなかったと報告された。平衡失調の原因として疑いを持っていた内耳については、微小なため詳細に検索できなかった。

### まとめと考察

野鳥救護の現場では、小鳥の雛の斜頸はそう珍しくないと聞いており、スズメやツバメ *Hirundo rustica* などの症例は多くの人を経験しているようである。しかしその原因について詳しく調べた報告は見当たらない。飼育下で発症することが多いからか、栄養的な問題であるとかビタミン類の不足であるとか言われているものの、明確な証明はできていない。成書ではビタミンBの添加により改善するとしているものもある<sup>[1]</sup>。それにもかかわらず現場の経験では、ほとんどの症例で「改善は難しい」、「予後不良である」などと言われている。今回も症例1と症例3では、限定的ではあるが餌の変更やビタミン剤の添加をおこなったものの改善は見られず、また症例2は飼育下ではなく自然の生育下で発症したものであったことから、ビタミン類の欠乏が原因であるという説は否定される可能性がある。

一般的に斜頸を呈する原因としては、ビタミンBおよびEの欠乏、パラミクソウイルス1型などの感染症、農薬中毒、頭部の外傷、大脳の血管障害および腫瘍などがあげられており<sup>[2,3]</sup>、さらに頸椎の発生異常によっても生じるとされている<sup>[3]</sup>。

今回の3症例をまとめると、

- ①発症時期は孵化後およそ10～11日齢である（症例2では未確認）
- ②発症後は、病状の進行も回復も見られなかった
- ③いずれの症例も、他に全身状態の異常を認めなかった

これらを検討してみると、これまで成書にあげられている原因では、どれによっても説明できないように思われる。さらに鳥類の人工育雛に関する専門書では、走鳥類の孵化直後の斜頸にビタミンBが有効であり<sup>[4]</sup>、ハト類ではビタミンB<sub>2</sub>欠乏で足や趾の弯曲が生じる可能性がある<sup>[4]</sup>とする以外には、小鳥類における斜頸の記述は見当たらないことから、地方病的な可能性も考えられる。今回の3症例は、孵化後1週齢程度の雛が発症する、平衡感覚器官に限定された障害が疑われた。

以上の3症例を経験し、これらが定型的な症状であると考えたことから、現在仮説を立てている。そのひとつは、線虫類の内耳への迷入による半規管の損傷である。口腔内に寄生する線虫類も報告されていることから、雛は親鳥から給餌を受ける際にこの感染を受ける可能性があり、耳管を通して内耳への迷入は、考えられることである。内耳の物理的損傷であれば、発症後、悪化も改善もしないという病態とは一致する。

またウイルス感染の例としては、イエスズメ *Passer domesticus* の巣内雛において、西部ウマ脳炎ウイルスに近縁な *Buggy Creek virus*（アルファウイルス）の感染で類似の斜頸を示したとの報告がある<sup>[5]</sup>。この例では斜頸のほかに不全麻痺や昏睡も示すとされ、脳に顕著な病変が見られたとあるので今回の症例と同一とは考えられない。しかし同ウイルスの標的臓器は幅広く、種あるいは日齢により様々な病態を示す<sup>[5]</sup>とされていることから、今回の症例にウイルスが関与している可能性も全く否定することはできないと思われる。

一方で、先天性や発達性のもので筋性斜頸、眼性斜頸なども存在する可能性がある。今回の症例は体軸を中心とした旋回型の斜頸であり、これらとは異なると考えられるが、さらに精査・鑑別が必要である。

小鳥の雛の斜頸は、症例は少なくないと思われるものの獣医学的な解明はおろか、あまり検討もされておらず、症例の情報が散逸している状態だと思われる。また今回の症例1と3は巣より落下しているが、自ら移動して落下に至ったのか、あるいは親が故意に落とすのかは不明であり、興味深いことである。

今後は引き続き同様の症例や情報を収集し、病理学的あるいは疫学的に検索して明らかにしていきたいと考えている。

### 引用文献

- [1] 野生動物救護ハンドブック編集委員会：野生動物救護ハンドブック、71、文永堂出版、東京（1996）

- 
- [2] B. H. Coles : バード・クリニック・プラクティス、  
桜井富士朗訳、31、インターズー、東京 (2002)
- [3] Peter H Beynon : 猛禽類、ハト、水鳥マニュアル、  
福士秀人他訳、144、206、242、271、275、310、325、  
327、学窓社、東京 (2003)
- [4] Laurie J. Gage, Rebecca S. Duerr : 鳥類の人工孵化  
と育雛、56、257、文永堂出版、東京 (2009)
- [5] V. A. O' Brien, C. U. Meteyer, H. S. Ip, R. R. Long,  
C. R. Brown : Pathology and virus detection in tis-  
sues of nestling House Sparrows naturally infected  
with Buggy Creek Virus, J Wildl Dis, 46, 23-32  
(2010)